

# 近江八幡と水郷

東京大学大学院  
都市工学専攻教授 西村幸夫

都市が映える風景とは――

## 守られた西の湖

近江八幡という八幡堀の再生や歴史的な町並みで有名だが、このところまた注目されてきている。2005年6月に制定された景観法のもとでのわが国初の景観計画が近江八幡で制定されたのだ。2006年9月1日施行の「水郷風景計画」がそれである。

豊臣秀次がつくった城下町の近江八幡に水郷？・・・あまりなじみがないかもしれないが、琵琶湖もこのあたりは古来、内湖が多く、その中で現存する琵琶湖最大の内湖が近江八幡市から東の安土町にかけての西の湖である。ヨシ原で覆われた、のんびりとした風情を残した水郷なのである。西の湖といっても他に東方の潟があるわけではない。周囲はすっかり干拓されてしまい、水田地帯の中に閉じこめられるようにぽっかりと残された巨大な水郷空間、それが今日の西の湖なのだ。

今ではバス釣りや水郷巡りで知られた存在にはなってきたが、この西の湖、かつて干拓から守るための熾烈な運動が繰り広げられたことを知る人はそう多くないかもしれない。東部ほ場整備事業計画という土地改良事業が予定通り行なわれていたら、現在残るクリークの多くも埋め立てられてしまっただろう。1980年前後のことである。八幡堀の再生とほとんど同じ時期の運動だった。

重要伝統的建造物群保存地区に選定されている近江八幡城下町の商家地区である。さらに城山を目指して北上すると、自然と内堀に行き着く。これこそかつてのホイエイアオイ茂るヘド口のトブから見事に再生された八幡堀である。

現在の八幡堀を歩いていると、ずっと昔からこの堀沿いの風景は変わらなかったように見える。しかしそうではなかった。堀を幅4mのコンクリート製排水溝として、残りを埋め立て、そこに駐車場をつくるプロジェクトに予算までついて、実施寸前までいったのだ。1970年代前半のことだった。計画はすんでのところ、地元若手業者を中心とするグループによって食い止められ、八幡堀は守られた。それだけではなく、散策の路として再生されたものではなく、ふるさとと近くにおいて守るものだった。

## 都市が映える風景とは

いまですっかり周辺となじんでしまった再生八幡堀であるが、その姿はこの伝統的建造物群保存地区周辺で完結しているわけではない。当然ながら、水は流れ来るのみならず必要であり、流れ去る下流域が不可欠だ。八幡堀も水郷システムの一環として機能しようやく意味がある。八幡堀が歴史の風景を演出する重要な場面となっているのは、八幡川として水循環システムが機能してこそその話である。つまり、近江八幡の歴史の町並みは水郷の文化的景観としてしっかりと結びついているのだ。

同時に水郷の風景は、たんにのどかな田園風景というだけでなく、都市の風景、さらには城郭の防御機構のなかに一体的に組み込まれている。近江八幡が教えてくれるのは、城下町と水郷とは持ちつ持たれつ

## 国の重要な文化的景観 選定第一号に

スケールの大きな水郷風景が残されているとはいっても、かつての網の目のようなクリークと較べるとわずかなものらしい。ほ場整備は大半が実現してしまっただ。そうはいっても今日のクリークの水郷風景は大変な地域資源となっている。その証拠に国の文化審議会は2005年11月18日、「近江八幡の水郷」を重要な文化的景観として選定するという答申を行なった。

重要な文化的景観とは2004年の文化財保護法の改正によって新たに導入された文化財で、地域における人々の生活又は当該地域の風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの、と法律上定められている。

近江八幡の水郷がその第一号に選ばれたのだ。これまた日本初である。この点でも近江八幡は全国の注目を集めることになった。近江八幡の水郷には西の湖とその周辺のクリークのみならず、琵琶湖までの川、水路や城下のお堀である八幡堀も含まれている。

## 鮮やかに甦った八幡堀

近江八幡の駅を降りて、城跡のある八幡山（鶴翼山）を目指して北上すると、しばらくして古い町並みの地区にたどり着

の関係にあるということ。つまり、都市が映える風景とは、風景の仕組みの中に都市が組み込まれているような、そんな風景のことなのだ。

かつて「八幡川よこれは市民の心のよこれである」と市民の猛省を促し、水質の程度を「市民の心のリトマス試験紙」としてとらえるという若者達の訴えが人々の具体的な行動として実を結んでいったのは、川が自分たちの生活の一部であるという実感を地域の人々が忘れ去っていなかったからである。八幡川は、そして水郷システム全体が、人々の心の中に生き続けていたのだ。だから物理的にも八幡堀も八幡川も水郷全体も現代まで機能し続けてきたのである。

しかし、そんな屁理屈をこねなくても、ただぼつと近江八幡の水郷風景を眺めているだけでも十分な気もする。眺めている自分もこのもの静かな風景の一部として受け止めるとしたら、それだけで幸せではないか――そう思いつつも、私はこの風景を今日にまで残すことに尽力した人たちの思いを想起し、そこに寄り添うことから風景を実感したいと思う。そして、この風景を共にするひとりとして、本邦初の水郷風景計画と重要な文化的景観の実現を喜びたい。



西村 幸夫  
にしむら ゆきお

東京大学工学部都市工学科卒業 同大学院修了  
明治大学助手 アジア工科大学助教授  
MIT客員研究員 コロンビア大学客員研究員  
などを経て現職  
専門は、都市計画、都市保全計画、市民のまちづくり論など  
世界文化遺産の評価等を行う世界遺産記念協会（ICOMOS）前副会長 文化審議会専門委員  
東京都景観審議会部会長など  
著書「都市保全計画」「町並みまちづくり物語」など多数



静かな湖面に岸の樹影がゆらめく 西の湖



近江商人の商家が軒を並べる新町通り（伝統的建造物群保存地区）



春の風景のために菓の花の種をまく 手漕ぎ舟の船頭たち



建築家ヴォーリスのまちでもある ヴォーリス記念病院本館（大正7年）



明石橋から眺める 甦った八幡堀 白壁の土蔵が水面に映える